

ボランティアとして参加して

■グループ“シサムをめざして”（函館） 飯田明

先住民族サミットに参加するのは、今回で二度目となった。北海道で開催された第1回目は、歴史に残る取り組みであった。私は裏方でお手伝いをし、大きな繋がりやの和ができるのを感じた。ここでの繋がりが、「七五郎沢の狐」アニメ制作の動きとなった。舞台は、裏夜景の穴場、函館市東山。ここで発生した医療系廃棄物の不法処理の現場、七五郎沢処分場の狐の神が語った人間への教訓である。創作神話「七五郎沢の狐」が版画となり、先住民族サミットに参加した市民の繋がりが、巡り巡って、アニメーションとなる予定である。完成が待ち遠しい！

函館から愛知サミットに参加すべく、10月15日、名古屋に飛んだ。そして、出会いは、二日目の16日、夕食会場の中華料理店で起きた。モリコロパークでの後片付けを終え、最後の方に、会場についた。ほぼ同時に着いた愛知県立大学のボランティアの学生3人と一緒にテーブルとなった。おじさんたちと若者たちとのコンパのようになり、どんなキッカケで参加したのかなどのお話をし、自己紹介となった。中の一人が、函館との繋がりの話をしだした。お父さんはイラン人。「小さい頃に函館の酒屋さんに、行ったことがある」と。エー、まさか、そんなことはな

いよな、と心の声が語り始め、電話して見ろよ、と更に強くなり、そんなことってあるのか、そうだったらおもしろいよな！！と。そして、酒屋の友人に電話をした。彼女の名前を言い、目の前にいることを伝えたら、直ぐに「代われよ！」と反応が帰ってきて代わった。

なんという偶然！　こんなってあるんだ！！驚きの出会いであった。それから、先住民族サミット四日目の最終日、打ち上げの時に彼女と会うことができ、思い出を、およそ、20年も前だろうか、昔一度だけ、お父さんと函館で会って、上野駅から、東京駅まで送って行ったことを話した。彼女から友人への手紙を預かり、函館に戻ってから友人に手渡した。今度は、函館で友人と一緒に会えるであろう。

先住民族サミット in あいち 2010に参加し、お手伝いできたからこそ、ドラマのような出来事に遭遇したのであり、多様な文化との接触、共存共生を、地球的な自然の大切さなどなど、あらためて感じる場所となった。COP10という国際会議にほんの一部だが、参加できた。今回も、有意義な経験を様々にさせてもらった。次回も何らかの形で貢献できればと考えている。

■愛知県立大学外国語学部国際関係学科 ラジャイ麗良

私は今まで先住民族の人々のお話を聞く機会などはなく、彼らの文化、抱えている問題を知ることなどはなかった。しかし今回先住民族サミットのお手伝いをさせてもらうことになり、たくさんの事実を知った。

世界中が経済発達ばかりを求めてきた時代、人間

はたくさんの自然を破壊してきた。そのなかでも昔からの人間らしい暮らし方を続けてきたのが先住民族の人々なのである。今の時代しか生きていない私たちの世代は昔どのように自然と共に生活していたのかはわからないだろう。そこで先住民族の人々は私たちにとって、とても良い先生のような存在なの

だ。私たちは実際に自然の一部であること、生物多様性の大切さを私は改めてこのサミットを通して知ることができた。そして今の私たちの生活の仕方を変えなければならないと改めて思った。

日本の先住民族、アイヌの方々のお話を通して私は彼らの心の傷そして仲間の絆を感じることができた。自分たちを兄弟と呼び合っているアイヌの人々はかつて住まいを奪われ、そして差別を受け、存在さえも否定され続けてきた人々なのである。

お話をされたアイヌの方々の中には学校で差別を受けいじめられ登校拒否をした方もいた。そのため皆自分がアイヌであることを隠して暮らしてきたのだ。そのような社会に作ったのは私たちであり、そ

の社会のなかに暮らしているのも、そしてその社会を変えることができるのも私たちであることを忘れてはならない。

私は先住民族の人々が抱えている問題を今まで知らなかった自分がとても恥ずかしい。しかし世の中にはまだこの事実を知らない人々がたくさんいるのではないだろうか。世界の人々に先住民族の人々の存在そして文化を知ってもらうためにも先住民族サミットの人々には活動もずっと続けてもらいたいと思う。私は今回先住民族サミットの活動に参加できたことをとてもうれしく思っている。そして私も先住民族の方々と共に多文化共生に向けて活動をしていきたいと思う。

■愛知県立大学外国語学部国際関係学科 伊藤亜衣

夏休み前に稲村哲也教授から、せかい SATO フェスタのお誘いを受けた。その時点で私の先住民族に関する知識はほぼゼロに等しく、あまり関心がなかったというのが正直なところだ。しかし、お世話になっている稲村教授の誘いは断れない。サークル仲間を誘い、10月15日から18日に亘って行われた先住民族サミットに2日間参加した。短期間であったが、大変貴重な心に残る経験となった。その中で私が思ったことをいくつかあげる。

同じ日本に住むアイヌ民族であるが、名称は知っていたものの小学校の社会の教科書の1ページに出てきたことがあったような…という程度の認識であった。彼らがどのような歴史を歩んできたか、どれほどの苦痛を強いられてきたか、また、今を生きるアイヌ民族がどのような活動をしているか考えたこともなかった。せかい SATO フェスタに参加して、日本は単一民族国家だと勝手に思っていた自分を恥じた。私達は先住民族に見習うべきところがたくさんある。彼らの強いアイデンティティ、自然や文化に対する愛。最も感銘を受けたのは、自分たちだけが食べる分のみを捕るという考えだ。世界はますます

便利になり、欲しいものは簡単に手に入る。それが当たり前になっていることで、モノの大切さや古くからの素晴らしい文化を忘れている。この地球は人類のものだけではないし、今を生きる私達だけのものではない。限りある資源をお互いに協力して守っていかなければならない。便利さによって脳が麻痺している現代人に声を大にして訴えてほしい。

日本の捕鯨が国際上で非難を浴びているが、先住民族の古くから行われている狩猟も避けられない。しかし、例えばイヌイットのアザラシ猟が動物虐待であり、残酷だという理由で片づけてしまうことはイヌイットの伝統や文化を軽視している。私達は先住民族とお互いの文化を尊重し合い、双方にとってよりよい世界になるようにする必要がある。

今回、せかい SATO フェスタに参加して、以前滞在していたオーストラリアを思い出した。オーストラリアにはブーメランで有名な先住民族アボリジニがいる。世界遺産であるエアーズロックは観光客が多数訪れる人気の観光スポットであるが、それはアボリジニの聖地である。彼らは観光客の登山を快く思っていない。完全に禁止されているわけではない

め、登るか登らないかは自己判断となる。私がエアーズロックを訪れた際この話を案内係から聞いたが、軽い気持ちで登山した。しかし、今考えるとあの時、自分は登るべきではなかったと思う。多数の観光客によって、少数の先住民族が不快な思いをするというのはどうなのか。オーストラリアにとってウルルは貴重な観光資源となっており、アボリジニの中にもウルルで生計を立てている人がいるのが現状だ。

■愛知県立大学外国語学部国際関係学科 藤澤健人

今回は大学に入り、初めての校外の活動として愛・地球博記念公園で行われた、せかい SATO フェスタの国際フォーラム&音楽交流祭に参加させていただきました。

今年の先住民族サミットは COP10 との連動ということもあり、生物の多様性や自然と先住民たちの関係に少しなりとも触れ、知ることができました。

当日の自分の担当はネイティブアートプロジェクトのサポートでした。こういった大規模な催し物に参加するのが初めてだったため不安だったものの、他大学の人や講師の方に丁寧に教えていただき、とても有意義な時間を過ごすことができました。当日は、子どもから大人までも昔の人たちが描いたアートを熱心にフラッグに描いている姿が印象的でした。自分たちも一緒になって描いているときはとても楽しかったです。

また、今回最も勉強になったことがアイヌという

私達はどうすべきだろうか。自分の思い出か、それとも文化か。

世界はますますグローバル化し、問題が山積みである。私達が今後この地球で他の生物ともうまく共存していくには、まずは相互理解が必要である。そのためには、まず自国を知り、世界に目を向けることだ。そう思わせてくれたせかい SATO フェスタにもっと多くの人に参加してもらいたい。

民族についてです。今までは名前を聞くばかりでほとんど触れる機会がなかったが、今回、アイヌ民族の方やアイヌのために活動されてる方々から直接お話しを聞く機会があり、アイヌ民族の現状やどういった活動をしているかを学ぶことができました。アイヌ民族は歴史的にもとても複雑であり、日本政府とも、アイヌを先住民族とするかどうかなどの問題で大変だったという。でも、私は一緒に話している中で、こんなにすばらしくアイヌを想っている人たちが活動しているのであれば、必ずアイヌ民族は途絶えることなくさらに発展していくのだろうと思えた。文化の面でも、アイヌの口承や音楽などとても素敵なものを体験することができた。これからもアイヌ民族だけでなく、世界中の先住民族を多くの人が理解して共生できる環境を作り上げていけたらいいと思いました。本当にこのイベントに参加できたことを光栄に思います。

■愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科 山田彩香

私は「せかい SATO フェスタ」にワークショップのスタッフとして参加させていただきました。

そのワークショップは、古代生物の絵を旗に模写していくといった内容のものであったのですが、一般の方にも小さなフラッグに模写を楽しんでいただき、

小さなお子様から大人まで、幅広い年齢層の方々に参加していただきました。会場には、私を含めイベントスタッフの描いた古代生物のフラッグがいくつも掲げられ、会場を彩っていましたが、そのインパクトはなかなかのものでした。

こういったイベントに参加させていただいたのは初めてだったのですが、自分の描いた絵がイベントの一部となって、会場を盛り上げていくということに、今までにないやりがいを感じました。

多くの人々が関わり合っただけのイベントをつくっていくということは、決して簡単にできることではないと思うのですが、この「せかいSATOフェスタ」では、会場が自然と一体となってイベントを盛り上げられていたように感じます。

また、会場で各先住民族の皆さんの環境問題の現状と取り組みが紹介されていたのですが、森林の伐採やゴミの埋め立てによって山から生物たちが姿を消していくといった内容のアニメーションやお話を聞き、現代で絶滅危機にある生物や、現時点では絶滅危機にさらされていないその他の生物も、これから何十年後、何百年後に古代生物と化して姿を消し

てしまわないように、私たちは少しでも生物が生息しやすい環境を維持していかなければならないのだなど、改めて痛感しました。

今、私たち一人一人ができる環境に対しての取り組みというのは、リサイクルやゴミの分別など、身近にあるほんの小さなことくらいしかないかもしれませんが、その当たり前のように思われている小さな取り組みをしっかりと行っていくことが、生物の生息を1日でも延ばすことにつながるのならば、私たちは日々、環境維持、生物多様性を意識して生活していく必要があるのだと思います。

今回、このイベントに参加させていただいたことは、私にとってとても貴重な経験となりました。

様々な事柄に目を向け、学ぶために、他国の人々や、幅広い年代の人たちと交流できる機会を、これからもっとつくってきたいです。

■愛知県立大学大学院国際文化研究科 博士後期課程 ソロンガ

「先住民族サミット」にボランティアとして参加することで、日本の先住民族アイヌをはじめ、アラスカ、グアテマラ、ニュージーランド、東ティモール、ネパール、台湾などの先住民族の方々を知ることができました。音楽祭では、音楽、舞踊、儀礼、芸術、工芸など、先住民族の豊かな文化に触れることができました。

また研究者も加わって、生物と文化の多様性を持続させるための道筋を模索し提言しました。生物多様性と文化多様性について、その危機を強く訴えました。環境との共生の知恵を培い、今日まで伝えてきた、先住民族の文化を再評価し、そこから学ぶことは、地球上のすべての人類にとって重要なことだと提言しました。

その基本理念の一つとしてあげられているのは「多様な文化と民族の共生の尊重」ということだと

思われますが、これが私に故郷のことを考えさせました。私の故郷中国内モンゴル自治区では、近年、環境改善の名目で代々牧畜業を営んで、自然とともに生きてきた牧民を強制的に移住させている「生態移民政策」を実施されてきました。国際社会があげているこの理念とは程遠い現実です。牧民を移住させてから牧草地は改善されるところか、地下資源開発に利用されていることが多いです。

「多様な文化と民族の共生」は社会のマジョリティである「漢人」の許す、あるいは認めるものに限られ、当事者であるモンゴル民族の権利、文化への配慮、尊重は脇に置かれることになっています。

中国社会にも、「経済効果よりも先住民の保護を優先に」という理念が必要とされる時が来るでしょう。その時こそ、「多様な文化と民族の共生の尊重」という理念が成り立つであろうと私は考えます。

■愛知県立大学大学院国際文化研究科 博士後期課程 金秋延

2010年10月17日から29日まで名古屋で開催された生物多様性条約の第10回締約国会議「COP10」のパートナーシップ事業として『先住民族サミット in あいち2010』が10月15日から18日まで開催された。4日間のイベントで私は開催スタッフの仕事を任された。

イベントのスタッフとして仕事をしたことは何回もあるが、今回のように文書の作成(アンケート文、スケジュールの作成、当日のマニュアルの作成、参加者リストの作成、当日配布資料の作成)からさまざまな準備(会場設営、立て看板、垂れ幕などの準備、学内周知、発表者用の水差しの用意)の仕事まで担当したのは初めてだった。

長いと思っていた準備期間はあっという間に過ぎ、不安のままイベントが始まった。15日、朝日ホールでの「オープニングイベント」では受付の予定だったが、カメラの担当者が不足していたため、午後から撮影をすることになった。初めてビュー・ファインダー・カメラで写真を撮ったせいか、近距離撮影の写真はかなりぼやけていた。結局使えた写真は少数だけ。後で写真を整理しながら、稲村先生からいろいろ教えていただいた。今ならビュー・ファインダー・カメラがうまく使えるかも。勉強になった。

一日目のイベントは無事に終わったが、二日目の国際フォーラムの配布資料がまだできていなかった。夜10時ごろ稲村先生と谷口先生と朝日ホールから大学に戻り、谷口先生と一緒に配布資料を作り始めた。疲れることは我慢できたが、荷物を運ぶため、夜中

に大学の廊下を一人で歩くのはさすがに怖かった。何年か前に見たホラー映画のシーンが思い浮かんだ。稲村先生も作業をしていたが、翌日の午前3時ぐらいになると、何日間も徹夜してきたせいで、さすがに先生も体力の限界を感じられたようだ。そういえば、先生は大学に寝泊まりしながら、徹夜で仕事をし続けてきたのだ。まだギリギリ20代である、この若い私にとっても、一回徹夜することは大変なのに、稲村先生の元気さにはさすがに驚いた。学部生から「癒しのおじさん」と呼ばれる稲村先生だが、それにプラス、元気があるということが印象的だった。

二日目の「国際フォーラム&音楽交流祭」はモリコロ・パークで行われた。シンポジウムの受付が主な仕事だった。参加者が少ない場合は、自らシンポジウムの「参加者」の役割をになうこともあった。おかげでシンポジウムの内容も聞くことができ、新しい知識も得た。

最後の国際フォーラムの準備は、講堂が使える日にちが決まっていたので、事前にはほとんどの準備を済ませた。だが、当日の受付はかなり混雑してしまった。特に県大生の受付は混雑し、問題があった。今後はもっといい方法を探すべきだと思う。

4日間のイベントはスタッフ全員の協力で大成功をおさめた。今回のイベント開催スタッフの、資料作成から会場設営に至るまでの仕事はいろいろ大変だったが、振り返ってみると楽しさと達成感があり、今となっては良い思い出である。

■愛知県立大学大学院国際文化研究科 博士前期課程 サラナ

2010年10月に愛知県・名古屋市を会場に、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催された。その一環として10月15日~18日に「先住民族サミット」が開催された。

「生物多様性」は単に生き物が多彩に存在すると

いうことではなく、「文化の多様性」ともいえるべき人と自然の豊かな関係にあるといえる。本サミットは先住民族が伝えてきた環境共生の知恵と価値観を共有し、「生物多様性」の持続にとって何が大切かを共に考えようという目的で開催された。

サミットにはアイヌをはじめ、海外からの先住民も参加した。私は主にお手伝いという形で参加したが、たくさん初めてのものに直面できた。まず、今まで身の回りの民族しか知らなかったが、世界の異なる先住民に出会うことができ、その民族の文化と自然とのつながりを知ることができた。さらに、彼らの自然と人とのつながりを大切にしている思いや、これからどう向き合っていくべきかを訴えている気持ちが分かりました。彼らの文化や社会については深くはわからなかったが、自然に対する思いと、そのための行動に感動した。

中でも、ニュージーランドのマオリ族のステューブン・ケントさんの話が印象に残った。我々の「身近な人」は家族であるが、マオリ族の「身近な人」は、家族以外に土、森、動物も、すべてが身近な存

在で、同じ家系図で繋がっているという。人を取り巻く環境も家族で、環境を傷つけることは家族を傷つけることである、と彼らが考えているということ知り、とてもびっくりした。また、環境を身近に考えることが生きることの基本だ、と言った。この話を聞いて、私は自分自身が生きることの基本ができていないという気がした。

彼が言った「生態環境を保護するには、環境や自然を家族だと思ふことが大事」だという話になるほどだと思った。

今回のサミットに参加できほんたによかった。これからもこのような活動に参加したいと思う。

■愛知県立大学国際文化研究科 博士前期課程 チョリモンチチカ

2010年10月に先住民サミットが行われました。私はそこで簡単な手伝いをさせていただきました。アイヌの方々をはじめ、海外からも多くの先住民が来られ、多くの研究者も加え、生物多様性に関する活発な議論がありました。私は中国内モンゴルの出身で、家ではヒツジなどの牧畜を営んでいます。なので、環境に大変興味があります。今回の手伝いで、多くのことを学ぶことができました。また、先住民による音楽、踊りなどの様々な文化にも触れることができました。

短い時間でしたが、各先住民の文化に触れて、たくさん知らないことについて聞くことができ、楽しかったです。色んな国に先住民が認められ、その文化を世界に広げていることに感動しました。

中国にも56の民族の多様な文化があります。中国では砂漠化が問題とされ、内モンゴルでは、草地を守るために牧民を移住させる政策が取られています。それによって文化が失われるなど様々な問題が起きています。伝統的な文化を守ることの大切さをあらためて考えました。

■愛知県立大学国際文化研究科 博士前期課程 司玉潔（スイジェ）

COP10パートナーシップ事業としての、せかいSATO フェスタ「先住民サミットinあいち2010」に参加したことは、私の記憶のなかで2010とともに貴重な経験の一つとして刻印され、保存されたといえます。

私は10月の15日～8日まで、先生の指示に従ってイ

ベントの準備などに協力しました。内容として写真をとったり、資料を配ったり、先住民たちのもってきた民族特色の織物などを販売する簡単な仕事でしたが、暇なときは会場に入って発表を聞くこともできるので勉強のいいチャンスでもありました。

私から見ると「先住民族サミットinあいち2010」は世界の先住民族の文化を楽しめる、勉強するイベントであり、人と自然、人と人のつながりを大事にしようとした意味深い活動です。それぞれの民族衣装を着て出演した先住民たちの音楽や踊り、歌などはそのまま私の記憶に残っていくでしょう。例えば、東ティモールの歌、アイヌ古式舞踊や伝統楽器トンコリ、マオリ戦闘の踊りや歌、沖縄の三線・エイサー、ネパール民族音楽など。もちろん私のモンゴル族の馬頭琴も。イベントのフィナーレでプレゼントとしてもらったアイヌの口琴ムックリは私の本棚の上においてあります、友達や隣人が家にきたとき紹介したりしていますが、演奏できないのが残念です。

2010年は、国連の定めた国際生物多様性年であり、名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議が開催されたことは私の研究テーマとも深くかかわっています。だから、そのイベントに参加できたことは私にとっては、言うまでもなくいい経験となります。

■愛知県立大学国際文化研究科 博士前期課程 陳莎

生物多様性と先住民族のかかわりを知り、伝えられてきた知恵と価値観を共有するイベント「先住民族サミット in あいち2010・マウコピリカ音楽祭」が10月15日（金）から18日（月）までの4日間、愛知県内の会場で開催された。今回の先住民族サミットでは、生物と文化の多様性がリンクしていることに着目し、世界の先住民族が育む音楽や舞踊・儀礼、芸術などを発表した。多彩で豊かな表現に、人間と自然が共生していく可能性を見出した。

私はスタッフとして、こういうイベントに参加できて、とてもいい勉強になった。自然が豊かで、生物多様性が保たれている状態は、人間にとっても「自の恵み」として多くの恩恵がもたらされる。が、世界中で続く開発によって生物多様性は危機にさらさ

2010年を振り返ると「生物多様性」という言葉との出会いは一番多かったと言えます。電車のドアでも町の看板でも「生物多様性」の宣伝ポスターを目にし、新聞などにも、殆ど毎日生物多様性の内容が載っていた。人々は生物多様性、つまり自然の生き物とのつながりに目を転じたことを実感した。

しかし、それから三ヶ月たったとき、「生物多様性」という言葉が急に消えてしまったようで、何か寂しい感じがします。COP10で名古屋議定書ができたといっても、宣伝ポスターやこれからの生物多様性への関心について目にするのはあまりにも少なくなっていました。

これからも、「生物多様性」に関心をもって、自然にやさしい先住民たちの生活文化と触れる機会があれば、積極的に参加していきたいと思っています。

れている。そして、その影響をもっとも深刻に受けているのが自然と共に暮らしてきた先住民族である。

彼らにとって、自然破壊によって生活環境を奪われることは、長い時間をかけて育んできた独自の文化を失うことと同じである。それは、自然と人間が共生するための様々な知恵や価値観を失うという意味で、人類全体にとっても大きな損失だということが、サミットを通じてよく理解できた。

アイヌの音楽をはじめ、世界のさまざまな音楽を聞いてすごく感動し、独自の文化のすばらしさを改めて実感した。私は雲南省出身で、タイ族だから、ふるさとの多様な自然や文化の大切さを身にしみて感じる事ができた。

■愛知県立大学大学院国際文化研究科 博士前期過程修了生 加藤小夜子

「先住民族サミットinあいち2010」にボランティアとして参加しました。大学では、配布するための印刷物、チラシを数人で組み合わせたり、講堂の会場設営をしました。机と椅子を倉庫から集めて並べたり、ホール座席にロープを張って座る場所を区切ったりしました。

16日は、モリコロパーク地球市民交流センターに集合して、先生が自動車で運んで来たチラシやポスターを受付まで運搬しました。その重いチラシを若い人はなんども往復して運んでいましたが、私は先生のご配慮により、会場入口でポスターを貼ったり、受付で名札を参加者に手渡したりして、結構忙しかったです。そんな訳で、残念ながら講演会場内の様子が分からず、来訪者から講演内容を質問されても答えられませんでした。

会場前の屋内広場では、色々な民族の音楽が奏でられ、先住民と大勢の観客が輪になって踊りました。受付の仕事が一段落して見に行った時は、アイヌの人たちが音楽や舞踊を披露しているところでした。アイヌ語での歌は、言葉は理解できなかったけれど、古くから伝わるアイヌ文化と民族の誇り、生物多様性を含み深い意味を感じました。

18日の愛知県立大学の学術文化交流センターでのフォーラムは、15日にすでに設営した会場付近にポスターや道案内図を貼り、参加者の案内をはかりました。この日は一般受付係を担当しました。ここで

気づいたことは、この地域に住んでいるアイヌの人たちの縁者が尋ねて来ていて、旧交を温めていたことです。

会場の後片付けを殆ど済ませていた時、スタッフの一人がコーヒーの袋詰めを抱えて来ました。聞けば、東ティモール産のコーヒーで、この場で売ることでした。全部で10個あり、慌てて片付けた机を戻して、参加者の目線に届くようにコーヒーを高く積み上げました。ここでコーヒーが売れるかどうか不安でしたので、案内板を立て、大きく太い字で「世界で一番おいしいコーヒー 1個500円」と書いて貼りました。それが1個、2個と売れ、多い人は4個も買ってくれました。こうして10個のコーヒーは、瞬く間に完売しました。東ティモールの人からコーヒーをどうして持って来たのか、売るならもっと多く持って来たらどうかと思いました。

今回の私の仕事はほんの手伝いに過ぎませんでしたが、一連の行事の中で、世界のこのような少数民族の存在すら知らないでいたことに気づき、とても勉強になりました。すべての行事が非常に盛大で、これまでにない密度の濃い充実した内容で、深い感動を覚えました。これだけの大きな行事はこれからも多分見ることができないでしょう。

私は昔、新聞社に勤めていましたが、今回の行事は、朝日新聞と愛知県立大学のすばらしい組み合わせの賜物だと思いました。

■愛知県立大学大学院国際文化研究科博士前期課程 王曦敏（オウギビン）

昨年の10月15日から18日まで、COP10を機に、「先住民族サミットinあいち2010」を開催しました。私たちはボランティア・スタッフとして、参加しました。

近代化と開発によって、自然環境の破壊とともに先住民の文化も喪失しています。先生たちの講演を

聞き、先住民族の歴史、現状、生物多様性など勉強になりました。全世界の先住民と自然環境は繋がっています。彼らの生活経験と知恵は学ぶに値するものです。彼らは代々、自然の豊かな所に暮らし、他では味わうことのできない自然のままの食材にも恵まれています。でも不法に先住民から土地を奪い、

極端な開発によって、生物資源の枯渇に直面しています。

先生のアンデス先住民族による生物多様性の創出、保全と持続的利用について聞き、アンデスの持続的な農耕の優れていることがわかりました。アンデスの農耕は生物多様性を守ってきただけでなく、古代から栽培化によって、人間に役立つ生物多様性を生み出してきたことがわかります。しかも、彼らは多くの種を栽培化しただけではなく、種の中の多くの在来品種を生み出すことによって、生物多様性を作り出してきたのです。つまり、アンデスは在来の多様な生物と遺伝子の宝庫です。彼らは持続可能な自然の利用のシステムに関する伝統的な技術と知識と考え方を維持してきました。

ネパールにおける先住民族とカーストの複雑性について聞き、ネパールも自然の多様性と共に文化的

多様性を持つということがわかりました。一方で、ネパールは超多民族国家であり、100以上の異なるエスニックグループに分れています。そのため、多くの問題があることも知りました。台湾のアミ族、彼らは海洋の民族です。魚を捕った後に感謝の心をもって豊漁になりますようにと祈ります。そして彼らに竹の枝をあげて、永遠に繁殖が継続するように願います。以上のような、具体的な様々な民族の知恵を身近に知ることができました。

中国も豊かな歴史、民族、文化を持っています。多文化の国と言えます。でも、近年の経済発展によって環境汚染、生物多様性の破壊、文化の喪失が進んでいます。先住民族の伝統的な音楽、踊りなど、豊かな文化に触れ、多様な文化は自然との調和によって維持されることを学びました。中国でも、もっと自然と文化を大切にすべきだと思います。

■愛知県立大学大学院国際文化研究科博士前期課程 方学善

今回、愛知県で開催された生物多様性の国際会議「COP10」に関する様々なイベントに参加することを通じて世界各国の先住民族に出会い、生物多様性と文化多様性の重要性に対する理解を一層深めることができた。生物と文化の多様性が大きなテーマとなり、世界各国の先住民族たちが、各々の生活と文化の中で育んできた音楽や楽器、踊り、服装、芸術などは、印象深いものであった。多彩で豊かな表現で、人間が自然と共生していく可能性を見出し、大自然の力強さを感じさせるものであった。

世界各国の先住民族たちは、自然環境と共生し、その中から培ってきた生活、人間の自然との共生の知恵を教えてくれた。自然の豊かさを維持と保護、つまり生物多様性が保たれている状態は、「自然の恵み」としてさまざまな恩恵を得ている我々人間にとっても大きな意義を持っている。

しかし、世界中で相次ぐ資源開発、環境汚染など

によって生物多様性は危機にさらされている。そして、その影響をもっとも深刻に受けているのが自然と共に生活を営んできた先住民族たちであるといえよう。資源開発にともなう自然環境の破壊によって、先住民族たちの生活が脅かされ、伝統文化が失われつつある。

その先住民族たちの文化の喪失と生活環境を奪われることは、長い時間をかけて育んできた彼らの独自の文化を失うことだけではなく、人間が自然と共生するための様々な知恵や文化の多様性に対する価値観を失うという人類全体の大きな損失でもある。

そのため、世界各国の先住民族たちの文化を尊重し、その文化の継承への理解を深め、「生物多様性と文化多様性」の関係と重要性を再認識することは、自然環境との調和、豊かな人間文化の現状と問題点を克服し、地球と人類全体の未来を考える重要な位置づけとなっていると思われる。